



Title	中国語・英語母語話者による日本語フィラー使用の比較分析
Author(s)	龍, 思好
Citation	大阪大学言語文化学. 2026, 35, p. 37-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105218
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国語・英語母語話者による日本語フィラー使用の比較分析*

龍 思好**

キーワード：フィラー、I-JAS コーパス、日本語学習者

In communication education, the communicative competence is emphasized, and the importance of fillers is pointed out in previous studies. Unlike Japanese L1 speakers, Japanese learners cannot use fillers as will, and there are cases in which they use their own native language in Japanese conversations. Studies on fillers have been mostly conducted using qualitative methods such as conversation analysis and discourse analysis, or the analysis of speech and functions of Japanese fillers rather than using quantitative methods.

In the language acquisition process, the native language plays an important role in various aspects. It is thought that the native language is an element which affects the use of fillers by the Japanese learners. To ultimately clarify the effect of the native language, it is necessary to analyze the use of fillers by different L1 speakers group. In this study, we had a contrastive analysis of Japanese fillers by Chinese and English L1 speakers using the I-JAS corpus, and eight types of fillers, such as “vowel-type,” “vague-vowel-type,” “eto-type,” “koso-a-type,” “nanka-type,” “nn-type,” “ma-type” and “kousou-type” were considered.

The results revealed that, regardless of the native language, in their conversations, all the intermediate learners used vowel-type fillers which were also used most frequently. In contrast, the nanka-type, vague-vowel-type, ma-type and kousou-type fillers showed the low frequency in both groups.

As for the differences, a statistically significant difference was observed between the two groups in the use of koso-a-type, nn-type, and eto-type fillers. The koso-a-type and eto-type fillers were used more frequently by English L1 speakers while the nn-type fillers were used more often by Chinese L1 speakers. These findings suggest several future study directions. First, it is necessary to have qualitative analyses focused on the koso-a-type, nn-type and eto-type fillers. In addition, to investigate the effect of the native language, not only Chinese and English L1 speakers, the analysis of fillers by other L1 speakers is needed.

* A Contrastive Analysis of Japanese Fillers by Chinese and English L1 Speakers (RYU Shiyo)

** 大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻博士後期課程

1 はじめに

フィラーは、言いよどみ、場繋ぎ語、間投表現などさまざまな呼び方をされており、談話を構成する重要な要素とされている(小西, 2018)。現在、会話教育ではコミュニケーション能力が重視され、談話を立ち上げたりつないだりする技術を育てるために、フィラーの重要性が指摘されている(山根, 2002)。石黒(2019)は初級・中級日本語学習者が日本語で話す場合、話している言語は日本語であるのに間に入るフィラーが母語になることがあると報告している。また、日本語の中に日本語ではない音声が入ると日本語学習者との接点がない日本語母語話者には耳障りだと受け取られることも少なくないと指摘している。そのため、そうした話し方の実態を知り、可能なかぎり母語話者に違和感のない話し方に修正する指導法を考える必要があると言及している。

現在、フィラーに関する研究は日本語フィラーの音声や機能に関する研究や、日英、日中、日韓などの両言語間のフィラーに関する対照研究は多く行われているが、日本語学習者のフィラーの習得に関する研究はまだ十分に行われていない。また、日本語学習者のフィラー習得に関する研究の多くは会話分析・談話分析という角度からの研究で、量的視点からの統計分析を行った事例は限られている。

さらに、学習者は新たな言語を獲得する過程を通して、母語の影響を受け続け、その影響は、音声、語彙、語用など、習得に広範囲にわたる。日本語学習者のフィラー使用においても、母語別での相違点があると考えられるが、現段階では母語別でのフィラー研究もあまり多くは行われていない。本稿では中国語・英語のそれぞれ母語とする日本語学習者のフィラー使用を分析し、その共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

2 フィラーの定義と認定基準

2.1 フィラーの定義

山根(2002: 49)は、音声面からの観察、談話上の位置、談話の種類などさまざまな観点から分析し、フィラーの機能を解明しようとする際に、フィラーを「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の一部分を埋める音声現象」と定義している。また、山根は表1のようにフィラーを分類している。本研究では、フィラーの定義について山根(2002)と同様に考えるため、フィラーを感動詞の中で抽出する際に、山根(2002)の定義や分類を援用する。

表 1. フィラーの分類¹

種類	形式／説明
(1) 母音型	「ア (ー)」「イ (ー)」「ウ (ー)」「エ (ー)」「オ (ー)」
(2) あいまい母音型	いずれの母音にも分類できないあいまいな母音
(3) エート型	「エート」「エートー」「エット」「エットネ」など
(4) コーソー型	「コ (ー)」「コーネ」「ソ (ー)」「ソーネ」など
(5) コソア型	指示語以外に用いられる「コノ (ー)」「ソノ (ー)」「アノ (ー)」
(6) ナンカ型	「ナニ」「ナンカ (ー)」「ナンテユーノ」「ドーユーカ」など
(7) ネー型	話し手が聞き手の注目を集めるための「ネ」「イヤ」「ハイ」など
(8) ハイ型	納得または理解するときに自分目当てに打つ「ハイ」「ウン」など
(9) マー型	「マ (ー)」「マーネ」など
(10) モー型	「モ (ー)」「モーネ」
(11) ンー型	「ン (ー)」「ントネ」「ウン」「ウント」など

2.2 フィラーの認定基準

小出 (2009) では、山根 (2002) のフィラーの定義に基づき、フィラーの認定基準を表 2 のように設定した：

表 2. フィラーの認定基準²

(1) 実時間的に発話やその他の行動に伴って現れる音声である
(2) それ自身は命題的な内容を持たないし命題との関わりも持たない
(3) 文のモダリティ要素でもないしモダリティ要素との関わりを持たない
(4) 談話標識（談話の組織を形成する要素）でもない
(5) 単独では文としての価値を持たない
(6) 当該の言語の中で、一定の音声形式を持つ
(7) 出力時に、出力を支える（内容形成、調整、対人的な配慮と調整など）ために発せられる音声である

I-JAS にはあらかじめ付与されたタグを検索する機能があり、フィラーを含む感動詞のタグ (F) で検索し、その検索結果と上記のフィラーの定義、認定基準に従い、別途ダウンロードした I タスクのプレーンテキストに出現している学習者のフィラーに CasualTagger³ でタグ付けを行った。

¹ 山根 (2002: 49-51) を参考にしている。

² 小出 (2009: 34) を参考にしている。

³ Imao, Y. (2022). CasualTagger (Version 1.1.6) [Computer software]. Retrieved from <https://sites.google.com/site/casualconc/other-applications/casualtagger>

3 先行研究とリサーチクエスション

3.1 言語間のフィラー対照研究

各言語にはフィラーが存在しており、その用法が共通する部分があれば、異なる部分もある。フィラーの翻訳や学習者のフィラー習得においては、母語のフィラーとの相違を解明しながら、外国語または第二言語としてのフィラーを指導するために、日中や日英など両言語間のフィラーの対照研究が進められている。

葛ほか（2017）はインタビュー番組の会話データを用いて指示詞型フィラーを研究対象とし、「情報処理能力表出機能」「命題内容調整機能」「対人関係調整機能」という三つの機能に基づき、日本語「あのー」と中国語「那个（nage）」の用法について日中対照分析を行なった。分析の結果、「あのー」と「那个（nage）」両方とも、「言葉探し」や「記憶探し」という指示詞の用法を継承した役割をもっとも多く果たしている一方、「命題内容調整機能」を持つ「あのー」と「那个（nage）」の使用率は両者とも一番低いことがわかった。また、「対人関係調整機能」において「那个（nage）」と「あのー」の使用はもっとも相違があり、その具体的な指導法を考察する必要があると指摘している。

章（2013）は日中雑談におけるフィラーに着目し、日本語母語話者の雑談資料と中国語母語話者の雑談資料を分析対象としている。日中両言語におけるフィラーを出現回数・出現率・出現頻度・出現位置を考察した上、会話のやりとりから日中フィラーの特徴と機能を比較した。分析の結果、日中両言語に現れたフィラーの相違点について、(1) 日本語のほうがフィラーの使用率と使用頻度が高い、(2) 中国人は日本人より母音型と指示型、順接型のフィラーを多用している、(3) フィラーの機能点については、日本語に現れたフィラーの機能の種類が多いようであると指摘している。また、その共通点については、(1) 中国語でも日本語でも母音型と指示型は多用される傾向が見られる、(2) フィラーの出現位置は中国語と日本語両方とも、発話中に集中していると指摘している。

渡辺ほか（2017）は言い淀み分布の日英対照研究のために、独話という談話形式に着目し、『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』中の模擬講演データに類似した『英語話し言葉コーパス（COP）』を構築している。英語コーパスのデータ収集についてはアメリカ西部の大学あるいは大卒以上の学歴を持つ20代～30代の若者男女各10名の講演音声を取録した。発話状況や話者の性別・年齢を考慮した上で、用いられるフィラーの種類や頻度を統計的に考察している。その結果、フィラーの語あたりの頻度を男女別に見れば、英語では男女間で有意差がなかったのに対し、日本語では男性の方が有意に高いことがわかった。文や節境界におけるフィラーの出現率は、英語でも日本語でも境界の種類や後続節長の両要因と関連があった。境界に関しては、フィラーの出現率がもっとも高いのは英語では文境界であるのに対し、日本語では文中の強境界であった。節中の語

数は、英語でも日本語でも、節頭のフィラーの出現率と関係があり、語数が多いほど、フィラーの出現率が上昇する傾向があったと報告している。

日中や日英など、どの異言語間の組み合わせにおいても、それぞれで使用されるフィラーは共通点と相違点を持っている。これらの対照研究を通し、言語学習者が外国語あるいは第二言語を使用する際の状況に何か示唆でき、フィラーの指導法に導くことができるのではないかと考えられる。

3.2 言語習得に関するフィラー研究

言語間のフィラー対照研究が進められると同時に、母語話者だけではなく、学習者が使用するフィラーの実態についての研究も多く行われている。

小出（2010）は日本語の学習レベルを初級・中級・上級・超級という四つに分け、KY コーパスを研究データにして中国語・韓国母語の日本語学習者が使用しているフィラーを考察した。その結果、初級・中級・上級レベルの学習者の会話で使用されなかった「こう」が超級レベルの学習者の会話で使用されていることを確認した。その上、「こう」と、同じコ系である「このー」について分析した。フィラーとしての「こう」が、超級学習者になってはじめて見られる要因は、自分自身の発話生成の過程にイメージ的な要素の言語的な取り込みを行いつつ発話を進めるという、より創造的な発話が行われるためであると結論付けている。

小西（2018）は I-JAS コーパスのデータを利用し、習熟度別とタスク別で日本語学習者のフィラーの使用実態を分析した。研究対象学習者は 12 の異なる言語の母語話者 370 名からなる。分析の結果、中級レベルから上級レベルになる過程で、ア類フィラーの使用率が減少する一方、アノ類フィラーは増加すると指摘した。また、初級から上級になると、エ類フィラーの使用率が減少し、エツト類フィラーは増加すると述べている。

横森ほか（2014）では、同じ必修英語授業を受講している日本国内の大学の一年生 8 人それぞれの英語発話データを対象とし、日本人学習者の英語発話におけるフィラー特徴を把握するため、分析を行なった。分析の結果、研究対象学習者のフィラーには英語語句型や日本語語句型はほとんど含まれず、母音型が圧倒的であることが分かった。そのうち、英語語句型フィラーの頻度の低さについては、学習者にとってフィラーとして利用できる英語表現が知識として定着していない可能性があるとは指摘している。

言語習得に関するフィラー研究を通し、学習者が外国語フィラーを使用する際に、それぞれの特徴があることがわかる。小西（2018）では日本語フィラーに対する日本語学習者全体的な使用実態が解明された。その一方、小出（2010）は中国語と韓国語を母語とする学習者を研究対象とし、「こう」は超級レベルになってはじめて学習者会話に現

れると指摘した。横森ほか（2014）は日本語を母語とする学習者のみを対象者とし、英語のフィラーを使用する際に母音型フィラー出現頻度が圧倒的に多いと言及している。このように、学習者が母語によってフィラーの使用実態が異なる可能性がある。異なる母語の学習者に相応しいフィラーの指導法を見つけるために、母語別でのフィラー分析が必要であると考えられる。

3.3 先行研究の問題点と本研究の位置付け

以上の研究から、母語によってフィラーの使用に違いがあることから、日本語学習者が日本語フィラーを使用する際に、母語から影響を受けている可能性が高いと考えられる。現段階では、前節で見たように、言語間のフィラー対照研究や学習者の個々のフィラーについて、またはフィラー全体的な使用状況を分析した研究が多いが、学習者を母語別に分けての研究が管見の限りない。

また、迫田ほか（2016: 94）は「母語の影響を見るのであれば、1カ国の母語の学習者のデータを見ただけでは主張できない。必ず、その言語体系とは異なる言語体系の母語1カ国以上の学習者のデータを比較分析することが必要となる」と述べている。日本語学習者がフィラーを使用する際における母語の影響を明らかにするには、本稿ではまず母語別で学習者のフィラー使用状況を考察する。

これらに対応するために、本稿では、言語・文化的な近似性が低く、言語体系も異なる中国語と英語を母語とする学習者を対象として、これまでの研究でほとんど行われてこなかったコーパスを用いた量的な分析を行う。これらを母語とする学習者間のデータの比較を通し、その相違点を母語の影響に重点を置いて分析する。

3.4 リサーチクエスション

3.3の内容に基づき、本研究のリサーチクエスションを以下のように設定する。

- (1) 中国語・英語を母語とする日本語学習者が使用するフィラーには、どのような特徴があるか。
- (2) 母語が異なる学習者間におけるフィラー使用の共通点と相違点はあるか。

4 研究手法

4.1 使用したコーパス

本研究には日本語学習者コーパス I-JAS のデータを使用する。「I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language)」は日本を含む20の国と地域で、12の異なる言語を母語とする日本語学習者1000人の話し言葉および書き言葉を横断的に収集し

たコーパスである。学習者には日本語能力テストを実施し、レベル判定を行っているため、レベル別、母語別にデータの比較が可能である。

I-JAS コーパスの中国語母語話者のデータには5回に分けて収集された合計200人のデータがあり、英語母語話者のデータには3回に分けて収集された合計100人のデータが収集されている。また、I-JASには発話・作文の複数のタスクが含まれている（迫田ほか, 2016）が、本研究では、日本語母語話者である調査実施者と学習者である調査協力者が対面で行った約30分の自然会話に近いインタビュータスク（Iタスク）のデータを使用する。

4.2 本研究における研究対象学習者

I-JAS コーパスで調査協力者としての学習者は全員がSPOTという言語能力テストを受けており、全員の成績が公開されている。SPOTテストは自然に話される速度で日本語の情報が処理できるレベルに至ってはじめて得点できるものであるため、従来測定が難しいとされてきた言語運用能力（performance）を反映した測定になっていると小林ほか（1995）が指摘している。また、小西（2018）はI-JAS コーパスを利用し、SPOT成績を基準とし、55点以下を初級、56～80点までを中級、81点以上を上級という区分で、学習者をレベル分けにした。本研究では小西（2018）のレベル分けの基準を援用した。

レベル分けの結果、中国語母語話者200人の中で、初級学習者が1名、中級学習者が160名、上級学習者が39名になる。英語母語話者100人の中で、初級学習者が38名、中級学習者が62名になる。中国語母語話者では初級学習者が極めて少ないと同時に英語母語話者では、上級レベルとして分類された学習者はなかったため、母語別に比較する際には、中級学習者間の比較を行う。最終的に、使用する学習者データは、中国語母語話者の中級学習者160名と英語母語話者の中級学習者62名となった。

なお、本研究の研究データとして用いた会話テキスト全体、および母語別における延べ語数と、一人当たりの平均延べ語数は表3に示している。

表3. 研究データ延べ語数（中国語・英語母語の中級学習者）

	延べ語数	平均延べ語数
研究対象者全体（222名）	479,742	2,161
中国語を母語とする中級学習者（160名）	337,918	2,112
英語を母語とする中級学習者（62名）	141,824	2,287

5 日本語学習者が使用しているフィラーの実態

この節では中級学習者が使用している各種類のフィラーの粗頻度を確認する。小西(2018)は、「ハイ」「イヤ」などは応答詞と考え、フィラーとは異なるものとして扱っており、応答詞の中では、「ウン」はフィラーとしての用法があるが、詳細な用法分類は明らかになっていないことを指摘している。そのため、本研究では、「ハイ」と「イヤ」「ウン」⁴を応答詞と位置づけ、フィラーとしては扱わない。さらに、フィラータグ付けの結果、学習者が使用しているフィラーの中で「モー」は出現していないため、本研究の分析から除外する。それに従い、本研究では、主に「母音型」「あいまい母音型」(表の中で「あいまい型」と略称する)「エート型」「コーソー型」「コソア型」「ナンカ型」「マー型」「ンー型」を集計した。なお、タグづけ済み⁵のフィラーの集計と検索、また統計的な分析は主に CasualConc⁶を使用し、その結果を用いてレベル別・母語別によるフィラーの使用を考察した。

5.1 中国語を母語とする中級学習者の粗頻度の記述統計

表 4. 中国語母語話者の中級学習者 (160 名)

	総頻度	割合	平均値	標準偏差	最大値	最小値
母音型	22,750	57.98%	142.19	114.77	618	8
コソア型	5,346	13.62%	33.41	52.48	299	0
ンー型	5,080	12.95%	31.75	40.31	239	0
エート型	3,562	9.08%	22.26	41.80	257	0
あいまい型	1,078	2.75%	6.74	16.46	124	0
ナンカ型	1,027	2.62%	6.42	16.94	103	0
マー型	359	0.91%	2.24	6.23	42	0
コーソー型	29	0.07%	0.18	0.54	3	0

⁴ I-JAS のプレーンテキストの記述に基づいて判断した上で、文脈から相手の発話に肯定を示すものや、自分の発話に納得を示すもの以外の「ン (ー)」や「ウ (ー) ン」を「ンー型フィラー」として扱う。

⁵ 5% のデータを用い、ダブルコーディングを行った結果、一致率は 98% であった。

⁶ Imao, Y. (2022). CasualConc (Version 3.0.4) [Computer software]. Retrieved from <https://sites.google.com/site/casualconcj>

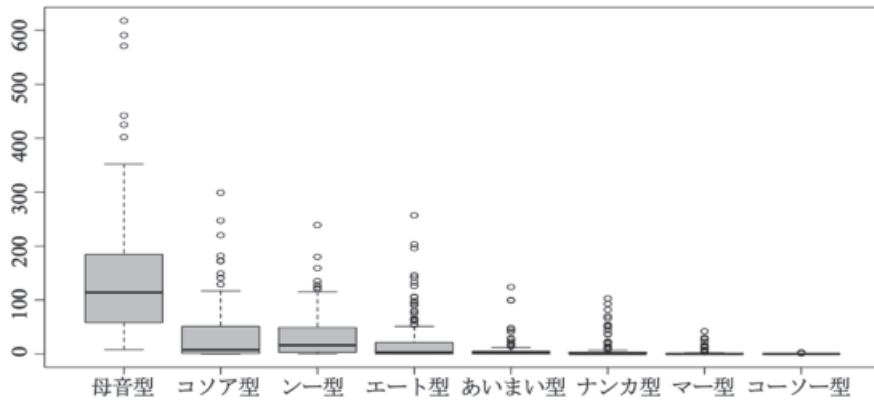


図 1. 粗頻度の箱ひげ図（中国語母語話者の中級学習者）

表 4 は中国語母語話者の日本語中級学習者のフィラー粗頻度の記述統計を表している。図 1 は表 4 の情報を反映した箱ひげ図である。

表 4 と図 1 を見ると、中級学習者の中では、どの学習者も母音型を使用しており、フィラーの中でもっとも使用頻度が高いことがわかる。母音型に次いで、コソア型とンー型、エート型の使用が多い。それに対し、あいまい母音型とナンカ型、マー型、コーソー型の使用割合は比較的低い。また、中国語母語話者の日本語中級学習者が使用するフィラーの中で、母音型フィラーのばらつきがもっとも大きい。一度の会話（30 分）で 600 回以上使用している学習者がいる一方で、ほとんど使用していない学習者もいる。

5.2 英語を母語とする中級学習者の粗頻度の記述統計

表 5. 英語母語話者の中級学習者（62 名）

	総頻度	割合	平均値	標準偏差	最大値	最小値
母音型	8,078	45.35%	130.29	94.74	354	12
コソア型	3,890	21.84%	62.74	69.32	251	0
エート型	3,186	17.89%	51.39	79.45	300	0
ンー型	1,169	6.56%	18.85	22.77	102	0
ナンカ型	562	3.16%	9.06	20.53	91	0
あいまい型	455	2.55%	7.34	13.26	72	0
マー型	451	2.53%	7.27	15.96	91	0
コーソー型	9	0.05%	0.15	0.4	2	0

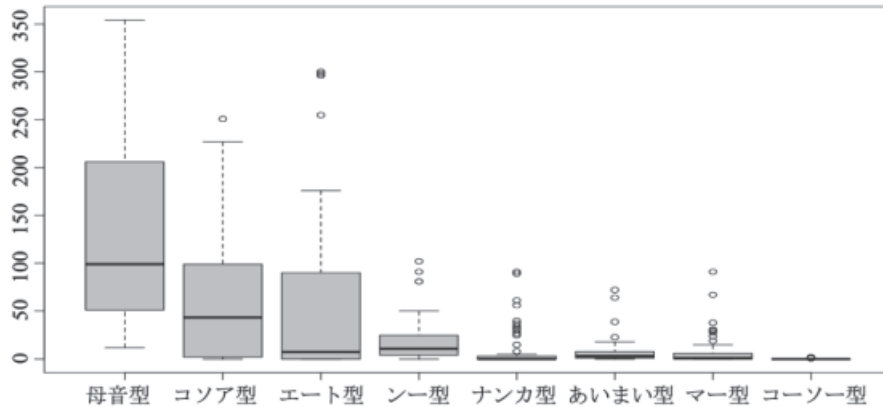


図 2. 英語母語話者フィラー粗頻度の箱ひげ図 (中級学習者)

表 5 は英語母語話者の日本語中級学習者のフィラー粗頻度の記述統計を表している。図 2 は表 5 の情報を反映した箱ひげ図である。

表 5 と図 2 の結果から見ると、中国語を母語とする中級学習者と同様に、英語を母語とする中級学習者が全員母音型フィラーを使用しており、その使用頻度が一番高いことがわかる。また、母音型フィラーの使用のばらつきは大きい一方、粗頻度の中央値と平均値も他の種類より高い。母音型の次に、コソア型とエート型の使用頻度が高い。ンー型とナンカ型、あいまい母音型、マー型の使用割合は 10% 未満であり、使用頻度は比較的に低い。コーソー型フィラーに関しては、一番多く使用されている会話テキストの中でも 2 回しか出現していないため、英語母語の中級学習者にはほぼ使用されていないと言える。

6 中国語・英語を母語とする中級学習者間の比較

本節では、中国語・英語を母語とする中級学習者間におけるフィラーの使用を比較する。なお、両グループにおける参加者の人数と発話長が異なるため、一人あたりの平均延べ語数である 2,161 語を基準として、各話者の実延べ語数で割り、2,161 をかけた平均延べ語数あたりの相対頻度をそれぞれ算出した。その相対頻度に基づいて表 6 を作成した。

表 6. 中国語・英語母語の中級学習者が使用するフィラーの相対頻度の記述統計

	中国語母語の中級学習者（160 名）				英語母語の中級学習者（62 名）			
	平均値	標準偏差	最大値	最小値	平均値	標準偏差	最大値	最小値
母音型	148.05	113.84	559.66	6.06	132.55	97.47	396.58	9.41
コソア型	31.15	46.54	230.85	0.00	59.13	66.03	266.43	0.00
ンー型	34.04	42.95	219.59	0.00	20.37	28.35	153.71	0.00
エート型	21.81	37.21	169.90	0.00	45.66	62.37	230.49	0.00
あいまい型	7.03	16.64	114.71	0.00	8.21	17.26	111.78	0.00
ナンカ型	5.90	15.28	85.15	0.00	6.66	14.63	71.12	0.00
マー型	2.22	6.12	38.28	0.00	5.47	10.43	48.22	0.00
コーソー型	0.19	0.55	3.60	0.00	0.12	0.33	1.37	0.00

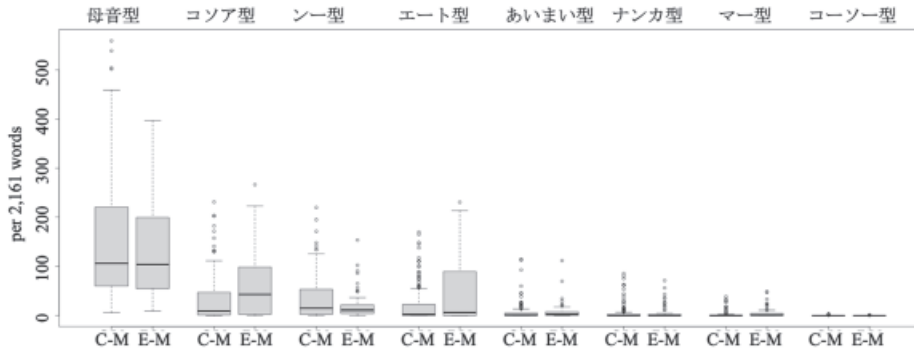


図 3. 相対頻度の箱ひげ図

(中国語母語の中級学習者 [C-M] と英語母語の中級学習者 [E-M])

ここでは中国語母語と英語母語両方の中級学習者を比較する。表 6 は中国語・英語を母語とする中級学習者のフィラー使用の記述統計（相対頻度）を表している。図 3 は表 6 のデータに基づいて作成した箱ひげ図である。なお、横軸の「C-M」は中国語を母語とする中級学習者、「E-M」は英語を母語とする中級学習者を示す。

全体を見ると、中国語・英語を母語とする中級学習者間では、母音型フィラーの使用頻度が一番高く、あいまい母音型とナンカ型、マー型、コーソー型のフィラーは他の四種類のフィラーより使用頻度が低い。母語に関わらず中級学習者が母音型フィラーを多用する傾向がある一方、ナンカ型とマー型、コーソー型のフィラーをあまり使用していないと結論付けられる。永井（2017）は学習者（中国語母語話者と韓国語母語話者）が用いたフィラーには、日本語として不自然な形式（母音型のイヤウの音）が見られると指摘している。これらのことから、母音型フィラーの多用の要因は学習者の母語との関

連性は薄く、中級学習者全体が母音型フィラーを多用している可能性が高いと考える。

コソア型フィラーを見ると、英語を母語とする中級学習者の方が使用頻度が高く、そのばらつきが大きいとわかる。シー型フィラーの場合は、中国語を母語とする中級学習者の方が使用頻度がやや高く、そのばらつきが大きい。エート型フィラーについては、英語母語話者の中級学習者が中国語母語話者の中級学習者よりばらつきがかなり大きいとわかる。

以上から、異なる言語を母語とする学習者間には共通点や相違点が見られる。共通点は、英語を母語とする日本語中級学習者と中国語を母語とする日本語中級学習者は、両グループにおける学習者全員が母音型フィラーを使用しており、その使用割合が一番高い。その一方、あいまい母音型とナンカ型、マー型、コーソー型フィラーに対する使用頻度は低い。

また、コソア型とシー型、エート型については、それぞれ使用頻度の差が観察されたが、それらの差は統計的に有意であるかどうかを検証するため、「IBM SPSS Statistics 27⁷」を利用して Welch の t 検定を行った。また、「サンプルサイズが大きくなればなるほど、統計的に有意であるという結果になりやすいという大きな問題がある」と竹内・水本（2014: 53）が指摘しているため、本研究では有意確率を確認するほか、効果量も含めて確認した。なお、効果量は竹内・水本（2014: 355）を参照し、小 = .20, 中 = .50, 大 = .80 を基準として判断する。なお、効果量 d は「IBM SPSS Statistics 27」により算出した。

表 7. 中国語・英語を母語とする中級学習者間における Welch の t 検定⁸

	p	効果量 d	平均値の差
母音型	.313	0.14	15.50
コソア型	.003	-0.53	-27.97
シー型	.006	0.35	13.67
エート型	.006	-0.52	-23.85
あいまい型	.644	-0.07	-1.18
ナンカ型	.733	-0.05	-0.76
マー型	.024	-0.43	-3.25
コーソー型	.281	0.13	0.07

⁷ IBM Corp. Released 2020. IBM SPSS Statistics for Windows, Version 27.0. Armonk, NY: IBM Corp

⁸ ボンフェローニの補正により、 $\alpha = .00625$ で判断する。

中国語・英語を母語とする中級学習者の間で、フィラー使用頻度の差の t 検定の結果を表 7 に示している。その結果、コソア型・シー型・エート型フィラーの使用頻度に有意差が確認できた⁹。

コソア型フィラーの使用頻度の差の効果量は 0.53 であり、中程度の効果量が示されている。中国語・英語を母語とする中級学習者の間におけるコソア型フィラーの使用の差はそれほど大きくないが、ある程度の差があり、中国語母語の中級学習者と比べ、英語母語の中級学習者の方が頻繁にコソア型フィラーを使用していると言える。

また、エート型についての効果量は 0.52 で、それも中程度であった。つまり、英語母語の中級学習者は中国語母語の中級学習者より頻繁にエート型フィラーを使用している。

シー型フィラーの場合は、その効果量は 0.35 で、コソア型とエート型の効果量より低く、小程度の差であった。シー型フィラーの使用の差がないとは言えないが、その差は小さかったため、英語母語の中級学習者と中国語母語の中級学習者の間におけるシー型フィラーの使用は、実質的な差はほとんどない可能性がある。

7 日本語フィラーと学習者母語のフィラーとの比較

中国語・英語母語の中級学習者間に、コソア型・シー型・エート型のフィラーの使用頻度に有意差が確認されたが、学習者が日本語フィラーを使用する際に、母語の影響を探るには、学習者母語（中国語と英語）のフィラーとの比較が必要である。そのため、本節では、日本語フィラーのコソア型・シー型・エート型を対象とし、学習者の母語のフィラーと比較しながら、母語からの影響を検討する。

中国語のフィラーに関しては、黄（2004）が中国語フィラーを Pause Filler と Verbal Filler という二種類に分けている。Pause Filler とは、一定の意味を持たない音声現象に近い「啊（a）」「嗯（en）」「喔（o）」といった言葉で、主に話し手の躊躇、不確定という心理状態を表すことが多いと黄（2004）が説明している。Verbal Filler とは元々意味を持っているが、フィラーとして発話に使われるときに元来の意味よりも発話を構成する機能を果たす語句であると黄（2004）が解釈し、さらに、元来の語意によって指示詞型、肯定・否定詞型、解釈型、自問自答型の四つに分類している。

英語のフィラーについては、Biber *et al.* (1999: 1096) によれば、英語母語話者が使用する英語フィラーは、主に母音型の uh/er や um/erm、そして談話標識としての well や I mean, you know から構成される。

⁹ コソア型・シー型・エート型フィラーの実例は付録に示している。

音声面から考えれば、ンー型フィラーの基礎形態「ンー」の発音は中国語フィラー「嗯(en)」と類似しており、「嗯(en)」はまた日本語フィラーの「ウン」と同様にフィラーとして使用されていると同時に応答詞としても使用されている。また、ンー型フィラーは英語の母音型の uh/er や um/erm と対応できる場合がある。さらに、中国語の「嗯(en)」と同様に、uh はフィラーとしても応答詞としても使用されている。このような音声面的な類似性は、中国語母語話者と英語母語話者の間におけるンー型使用の差はそれほど顕著ではない要因であると考えられる。

意味的な面から見れば、日本語フィラーの中には指示詞型フィラーである「コソア型」フィラーがあり、これに対し、中国語フィラーの中にも指示詞型として使用されている「这个(zhege)」と「那个(nage)」がある。本研究で利用したデータにおける中国語母語話者と英語母語話者間の相違点により、中国語を母語とする学習者がコソア型のフィラーを使用する際に、母語からの影響を受けている可能性が高いと考える。

また、エート型・コソア型のフィラーは発話冒頭に出現する場合が多く、話題の転換や記憶探し、言葉探しという機能面から見ると、英語の well や you know との類似性が見られる。この機能面の類似性が英語母語話者が日本語エート型・コソア型のフィラーを多用する要因として考えられる。

以上のように、音声面及び意味的な面、機能面から、日本語フィラーに対応できる中国語フィラーや英語フィラーは何種類存在することがわかる。しかし、日本語フィラーと学習者母語のフィラーの関連性を明らかにするには、具体的な文脈から分析をしなければならない。

8 まとめと今後の課題

中国語・英語を母語とする中級日本語学習者間におけるフィラー使用の考察を通し、その間の共通点と相違点がわかった。

共通点は、母語に関わらず、中国語・英語母語の中級学習者が全員母音型フィラーを使用しており、その使用頻度も一番高いこと、またナンカ型とあいまい母音型、マー型、コーソー型フィラーに対する使用頻度が比較的に低いということである。

相違点については、中国語・英語母語の中級学習者間に、コソア型・ンー型・エート型のフィラーの使用頻度に有意差が確認できた。コソア型とエート型フィラーは、英語母語の中級学習者の方が頻繁に使用していることがわかった。

本稿の限界として、データの制限により母語別で中級学習者の使用実態しか考察できなかった。また、中国語・英語を母語とする中級学習者が使用するコーソー型のフィラーについては、会話の中に一度もそれを使用していない学習者が多い。そのため、学習者

が使用するコーソー型フィラーに対してノンパラメトリック検定、あるいは零膨張モデルで有意差を再度確認する必要がある。今回の研究データとなる I タスク会話はインタビュー会話であり、会話の話題は留学生にとって身近なものがほとんどで、大きな違いが見られなかったが、学習者は言語レベル以外に、性別や年齢、学習経歴などさまざまな異なりがフィラーの使用にも影響する可能性があり、混合効果モデルを用いることで、より詳細な分析ができる可能性がある。さらに、最終的にフィラーを使用する際に母語からの影響を解明するには、特に今回有意差が観察された種類のフィラーについて、どのような状況において使用が異なるかを明らかにするには、具体的な文脈からの質的な分析をする必要があり、これを今後の課題とする。質的な分析をする際に、主に山根(2002)のフィラー機能「話し手の情報処理能力を表出する機能」「テキスト構成に関わる機能」「対人関係に関わる機能」¹⁰を援用し、学習者の発話を中心に、比較対象として日本語母語話者の発話を加え、機能面から分析する予定である。

付録：学習者の発話に出現するフィラーの実例（プレーンテキスト）とその機能

実例	機能
CCT61-I-02160-K (前略) 田舎ーに帰って、みんなーの〈うん〉あ、おじいさんの〈うん〉(中略) おか(お墓)を整理します。	テキスト構成機能
CCM08-I-03170-C (前略) どんな映画だったんですか？ CCM08-I-03180-K えっとーどんな映画で、百一、『百一のプロポーズ』	情報処理能力表出機能
CCH20-I-03450-C へーどうして人事ですか？ CCH20-I-03460-K んー、んー私にとって電子製品、に一ついて、んーりょう、了解しません	情報処理能力表出機能

参考文献

- Biber, Douglas., Johansson, Stig., Geoffrey, Leech., Susan, Conrad., & Edward, Finegan.
(1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- 韋蘭佳 (2013). 「フィラーにおける日中比較研究」 西安外国語大学大学院修士論文.
- 石黒圭 (2019). 「中国語母語話者のフィラー使用はどう変わっていくかー日本語会話における話し手の思考の言語化と聞き手への影響ー」 第18回対照言語行動学研究
会講演.
- 葛欣燕・松村瑞子 (2017). 「指示詞型フィラーの用法についての日中対照分析ー日本語

¹⁰ 学習者の発話に出現するフィラーに関する機能は付録を参照。

- 『あのー』と中国語『那个 nage』の機能を中心に」『言語文化論究』38, 41-58.
- 小出慶一 (2009). 「現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究－多機能化、フィラー、フィラー化」『日本アジア研究』6, 1-37.
- 小出慶一 (2010). 「日本語学習者の発話に見られるフィラー『こう』について」『埼玉大学紀要 (教養学部)』46(2), 99-112.
- 黄佳瑩 (2023). 「日本人中国語学習者のフィラー使用の考察—遠隔接触場面を中心に—」森泰吉郎記念研究振興基金報告書. <https://www.kri.sfc.keio.ac.jp/report/mori/2004/c-43.htm>
- 国立国語研究所 (2024). 『日本語話し言葉コーパス』.
- 小西円 (2021). 「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」『国立国語研究所論集』15, 91-105.
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史 (1993). 「日本語能力簡易試験 (SPOT) の得点分布傾向: 中上級向けテストと初級向けテスト」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10, 107-119.
- 迫田久美子 (2020). 「I-JAS 誕生の経緯」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編著) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門: 研究・教育にどう使うか』(pp.2-13). くろしお出版.
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編). (2020) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門－研究・教育にどう使うか－』くろしお出版.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』6(3), 93-110.
- 竹内理・水本篤 (2014). 『外国語教育研究ハンドブッカー研究手法のより良い理解のために』松柏社.
- 永井絢子 (2017). 「対話に見られる日本語学習者のフィラー－連続使用に注目して－」『日本語教育方法研究会誌』24(1), 10-11.
- 山根智恵 (2002). 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.
- 横森大輔・遠藤智子・河村まゆみ・鈴木正紀・原田康也 (2014). 「日本語を第一言語とする英語学習者の比較的自発的な発話におけるフィラーに見られるいくつかの特徴」『日本英語教育学会第43回年次研究集会論文集』89-96.
- 渡辺美知子・外山翔平 (2017). 「『日本語話し言葉コーパス』と対照可能にデザインされた英語話し言葉コーパスにおけるフィラーの分布の特徴」『国立国語研究所論集』12, 181-203.